

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2026

Spring

伝統と革新にふれる
イギリスの船旅

第二特集

人々を魅了する南米の中心都市
ブエノスアイレス

[発行] (株) ジャパングレイス



海から訪ねる イギリス紀行

石造りの街並み、長い歴史を刻む港、そして今を生きる人々の日常。イギリスは、時代の記憶を大切に抱えながら、常に新しい表情を見せてくれる国です。ピースボートが寄港する街々には、王室文化や産業革命の足跡だけでなく、音楽やアート、食などを通じて育まれてきた豊かな暮らしがあります。港に降り立ち、街を歩くことで初めて見えてくる、この国の奥行きある魅力をぜひ体感してください。



UNITED KINGDOM



GLOBAL VOYAGE
2026 Spring

CONTENTS

特集

海から訪ねる

イギリス紀行 P3

時代が交差する街

ロンドン P4

港町に刻まれた歴史と音楽

リバプール P6

北アイルランドの玄関口

ベルファスト P7

ブリティッシュ・グルメ

..... P8

イギリスよもやま話

..... P9

水先案内人から届いたエッセイ

旅がひらく、世界の心と扉 P10

第二特集

人々を魅了する南米の中心都市

ブエノスアイレス P12

人生を踊る、

アルゼンチンタンゴの世界 P14

伝統とヨーロッパ文化が融合した

アルゼンチングルメ P15

船上を彩る音楽の仲間たち

..... P16

新クルーズディレクター紹介

..... P18

表紙の写真

「ビッグベン」はウエストミンスター宮殿の時計台につけられた大きな鐘の愛称。





5:数々の戴冠式を見守ってきた荘厳な「ウエストミンスター寺院」は街に静かな存在感を放つ。6:記念碑と噴水に囲まれた「トラファルガー広場」は、街歩きの拠点として親しまれている。



「タワーブリッジ」をくぐるオリビア号。橋げたが上がったのは2万トン級の客船ならではのショーだった。



1:テムズ川に架かる可動橋「タワーブリッジ」がロンドンの象徴として迎える。2・3・4:地元の人々と観光客でにぎわう「バラマーケット」は世界中の街の食を楽しめる。

ロンドンの顔に出会います。音楽文化に触れたい人にとって、「アビー・ロード」は欠かせない場所です。ビートルズのアルバム『アビー・ロード』のジャケット写真で有名なジャクソン5は、今も多くの人が訪れ、ロンドンが生み出したカルチャーの象徴です。



先史時代の謎を今に伝える「ストーンヘンジ」の巨石群が悠久の時間を感じさせる。

に築かれた「ロンドン塔」と「タワーブリッジ」が姿を現します。防衛と統治の歴史を担ってきた城塞と都市の発展を支えてきた橋が並ぶ風景は、過去と現在を同時に語りかけてきます。観光スポットを巡るツアーや乗り降り自由な観光バスとして利用できる赤い2階建てバス(ダブルデッカー)が行き交う様子も、ロンドン名物の一つです。

街を北西へ進むと「トラファルガー広場」の開放的な空間が現れます。ネルソン提督の記念碑を中心に、人々が集い、語り、街の活気を感じ取ることが出来ます。さらに足を延ばせば、巨大なネオンサインとエロスの像が目を引き、「ピカデリーサーカス」へ。夜になるとネオンサインとライトが輝き、劇場街やショップが立ち並ぶにぎやかなロンドンに出会えます。

チャーターの影響を感じさせます。また1000年以上の歴史を持つイギリス最大規模の「バラマーケット」では、食や雑貨を通じてロンドンの今を体感できます。観光地でありながら、暮らしに根ざした空気が流れている点もこのマーケットの魅力です。

郊外に目を向ければ紀元前3000年〜前1500年頃につくられたとされる環状列石(ストーンサークル)「ストーンヘンジ」を訪れ先史時代の文明にふれることもできます。また世界最大級の王宮でイギリス国王が過ごす場所として知られる「ウィンザー城」観光も、豪華なステート・アパートメントやロイヤルウエディングが行われた「セント・ジョージ礼拝堂」など見どころは尽きません。



テムズ川からビッグベンを望む。時計台の正式名称は「エリザベスタワー」だが一般的にビッグベンと呼ばれている。名前は工事責任者のベンジャミン・ホールに由来しているなど諸説ある。

ロンドンを歩き、巡り、歴史、文化、アートを堪能する。

時代が交差する街 ロンドン

ロンドンの魅力は一つに収まりません。街を往けば国会議事堂や寺院が並ぶ賑やかなエリアから、マーケットや音楽文化が息づく通りまで、歩くごとに表情を変えていきます。名所を巡ることはもちろんですが、街の日常に触れるのも素敵なひととき。重厚さと親しみやすさが共存するロンドンをゆっくり味わってください。



ロンドンの旅は、テムズ川を起点に始まります。川沿いに広がる街並みは、交易と文化交流によって形づくられてきました。2002年ピースボートクルーズで使用していたオリビア号が、「世界」で美しく豪華」と称される「タワーブリッジ」をくぐってロンドンに入港。その橋げたが上がったときには、ロンドンっ子たちが目を丸くし黒山の人だかりができた、というエピソードがあります。

ウエストミンスター地区では、「国会議事堂」と「ビッグベン」がロンドンの象徴として威厳ある姿で迎えてくれます。隣接する「ウエストミンスター寺院」は、王室の歴史と信仰の中心として、静かな存在感を放っています。このエリアを歩くことで、ロンドンという街の成り立ちを感じることが出来ます。東へ進めば、イギリス王室を開いたウィリアム1世によってテムズ川沿い



北アイルランドの玄関口 ベルファスト

ベルファストは英国とアイルランド双方の歴史が交錯する、奥行きをもった街です。市庁舎やオペラハウスといった格式ある建築が街を彩り、タイタニック号建造地として知られるエリアには、最新技術を駆使した博物館があります。北アイルランド紛争の平和の象徴ともいえるピースウォールや、市街地から足を延ばせば玄武岩の石柱群が続く、世界遺産のジャイアンツ・コースウェーへも日帰りで行くことができます。



BELFAST

街には産業革命時代の名残を感じさせる建物が点在し歴史を物語っている。



4:街の歴史と和解への歩みを伝える壁画が並ぶ「ピースウォール」。5:19世紀から続く劇場「グランドオペラハウス」が街の文化と芸術を支えている。6:自然の造形美に圧倒される世界遺産の海岸線「ジャイアンツ・コースウェー」。



7



7・8・9:豪華客船タイタニック号の物語を体感できる現代的な博物館「タイタニック・ベルファスト」。

街歩きで見えてくる ベルファストの多様性

ベルファストは北アイルランドの首都であり、長い歴史を誇る港町です。街の中心には19世紀末に完成した市庁舎が堂々と建ち、その美しい外観と内部の空

間は往時の繁栄を伝えていきます。ベルファストの歴史を象徴する存在が「タイタニック・ベルファスト」です。この博物館は、世界的にも有名な豪華客船タイタニック号が建造されたことを記念する施設で、インタラクティブな展示を通じてタイタニックの軌跡を追体験できます。

平和を象徴する存在である「ピースウォール」は、かつての紛争の歴史と和解への歩みを伝えています。壁の両側には色鮮やかな壁画が描かれ、過去と対話しながら歩くことで、現在のベルファストに息づく多様性や共生の姿が見えてきます。歴史建築として外せないのが「グランドオペラハウス」。19世紀末に建てられたこの劇場は、優雅な内部空間と文化的なイベントで街の芸術シーンを支え続けています。

郊外に目を向けると世界遺産の「ジャイアンツ・コースウェー」が待っています。六角形の玄武岩が海岸線に連なる、数千万年前の地殻変動が生んだ奇跡ともいえる光景は、訪れる人を圧倒します。



港町に刻まれた歴史と音楽 リバプール

イングランド西北部に位置するリバプール。交易の拠点として栄えた港には、荘厳な大聖堂や重厚な歴史的建造物が並び、街を歩けば、芸術、文化、スポーツのメッカとしての活気も感じられます。港から市街地へは徒歩でもアクセスしやすく、自由散策と観光のバランスのとれた寄港地であると同時に、選択肢の多いオプションツアーも魅力です。

かつての海商都市はイギリス屈指の文化都市へ

港を中心に発展してきたこの街は、マージー川沿いの景観からその歴史を感じることができません。船を降りてまず訪れたいのが、かつて世界遺産にも登録されていた「ピアヘッド」周辺。産業革命以後の繁栄を物語る「ロイヤル・ライヴァー・ビル」をはじめとする重厚な建築群が並び、港町としての誇りを今に伝えています。「アルバート・ドック」で海洋交易の歴史を、近くの「リバプール博物館」でこの街が世界と結ばれてきた背景を知ることによって散策がより深いものになります。

市中心部へ足を延ばすと、堂々とした佇まいの市庁舎をはじめとする歴史的建造物が街の格式を感じさせます。さらに進めば、音楽の街として世界に名を知られるエリアへ。ビートルズ銅像の前には今も世界中から多くのファンが集い、彼らがかつて演奏した「キャヴァーン・クラブ」ではその軌跡を身近に感じることができます。

街の南側には二つの大聖堂が向かい合うように建っています。英国国教会最大級の「リバプール大聖堂」は街のシンボルでもあり、110mもの塔がそびえ



LIVERPOOL

港町の歴史を語る水辺の倉庫群。今は文化と賑わいの拠点。



1:マシュー・ストリートにあるビートルズファンの聖地「キャヴァーン・クラブ」。2:世界中から訪れるファンを夢中にさせるビートルズショップ。記念撮影のスポットとしても最適。3:レコードや記念品が並ぶビートルズ愛が詰まった店内。



威風堂々と街を見守る英国最大級の荘厳な聖堂。

ベイカーストリートの隣駅セント・ジョンズウッド。この近くに世界一有名な横断歩道がある。ビートルズ事実上のラストアルバム『アビー・ロード』（1969年）のカバー写真がここで撮影されたため



世界一有名な横断歩道にまつわるエトセトラ

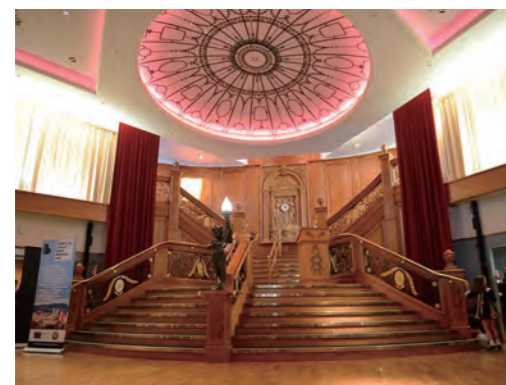
航海作家カナマルトモヨシが綴るイギリスよもやま話

航海作家カナマルトモヨシが綴る

だ。メンバー4人が横断歩道を渡るジャケットで知られるアルバムは大ヒット。やがて世界中からやってくるファンが4人の真似をして横断する「聖地」となり、ここは2010年12月、建物以外で初めてイギリスの文化的・歴史的遺産に指定された。ただし現在の横断歩道はアルバムカバーに使われた当時のものと異なる地点にある。後に数メートルほど移設されたためである。

タイタニックから生還した、唯一の日本人乗客

1912年、ある客船がベルファストで竣工した。その2週間後、それは氷山との接触事故により沈没する。乗員乗客約1500人が犠牲となり、生還できたのは710人。「タイタニック」生還者には唯一の日本人乗客・細野正文（1870〜1939年）の名があつた。



た。鉄道官僚だった細野はロシア・サンクトペテルブルク留学を終え、帰国のためタイタニックに乗船していたのだ。なお彼の孫はYMO（イエロー・マジック・オーケストラ）で世界を魅了したミュージシャン・細野晴臣さんである。沈没事故の100年後、当時の造船台の上にタイタニック・ベルファスト博物館がオープン。悲劇を現代に伝える。

航海作家カナマルトモヨシ氏が、クルーズの人気寄港地の一つであるイギリスに関するよもやま話を3つお届けします。ビートルズの逸話や名曲「ロンドン橋落ちた」に隠された意外な史実などが、寄港地への想いをよりいっそう高めてくれます。



カナマルトモヨシ(航海作家) 日本各地のみならず世界の五大大陸をクルーズで訪問した経験を持つ航海作家。世界の客船を紹介する「クルーズシップ・コレクション」での執筆や雑誌「クルーズ」(海事プレス社)に連載記事やクルーズレポートを寄稿している。

ロンドン橋にまつわる大なる勘違い



2002年にオリビア号がぐったタワーブリッジ。それを「ロンドン橋」と勘違いしている人のなんと多いことか。ロンドン橋はタワーブリッジよりも少しだけテムズ川上流にある。ローマ人が46年に初めて橋を架けてから、1750年までテムズ川唯一の架橋だった。この橋を世界的に有名にしたのは童謡「ロンドン橋落ちた」。何度も落ちた（壊れた）ことから、この曲が歌われるようになった。現在の橋は、約50年前の1973年に開通。その知名度とは裏腹にコンクリート製で地味なため、壮麗なタワーブリッジをロンドン橋と誤解する人が続出しているのだ。



【フィッシュアンドチップス】 白身魚のフライとポテトを組み合わせた、イギリスを代表する国民食。揚げたてを頬張る素朴な味わいが長く愛されています。



【スコッチエッグ】 ゆで卵をソーセージ肉で包み、衣をつけて揚げた一品。パブ料理として親しまれ、軽食にもぴったりの伝統料理です。

British Gourmet

ブリテッシュ・グルメ

イギリスの食文化は、素朴で実直。その土地の暮らしや歴史が、料理に映し出されています。家庭料理として受け継がれてきた味や、街角で気軽に楽しめる定番メニュー、そして午後のひとときを彩るティータイム文化。気取らず、しかし味わい深い英国グルメを通して、街と人々の暮らしを感じてみませんか。



【フル・イングリッシュ・ブレックファスト】 ベーコンやソーセージ、卵、豆を盛り合わせた伝統的な朝食。一日の始まりをしっかり支えるイギリスらしい食文化です。



【ローストビーフ】 家庭料理として親しまれてきた伝統料理。お祝いや家族が集まる際の定番です。じっくり焼き上げた肉の旨みが口中に広がります。



【ストロベリーチョコ】 甘酸っぱいイチゴとチョコレートの組み合わせが楽しい人気のお菓子です。ティータイムのお供や贈り物にも喜ばれます。



【キャロットケーキ】 にんじんの自然な甘みとスパイスが調和した、家庭的なお菓子。野菜を用いた素朴な味わいが紅茶にぴったりです。



【アフタヌーンティー】 午後のひとときをゆったり過ごすためのアフタヌーンティーは、味だけでなく時間そのものを楽しむ文化です。19世紀からはじまった習慣は、今も人々の社交の場として大切に受け継がれています。

British Goods

おみやげにぴったり英国雑貨

紅茶文化や王室の歴史に育まれたイギリスのお土産は、実用性と物語性を兼ね備えたものが豊富。日常で使うたびに、旅の記憶がよみがえります。



ティーバッグ紅茶 英国の紅茶文化を手軽に持ち帰れる定番土産。香りや味の違いを楽しめる豊富な種類も魅力です。



ギンガムチェックの帽子 英国らしい柄使いが印象的な帽子は、旅の記念としても日常使いにもぴったりです。



シングルモルトウイスキー 蒸留所ごとの個性が際立つ一本は、英国の風土と伝統を味わえる大人のお土産です。



テディベア 英国生まれのテディベアは、子どもから大人まで親しまれる定番アイテムです。



ポーチ 旅の記念として国旗デザインが目を引きまます。普段使いに小物入れとして活躍します。



マグカップ 朝のコーヒーや紅茶の時間に、旅の記憶を思い出させてくれる定番土産です。



Reykjavik / アイスランド

レイキャビク / 北大西洋に面した世界最北の首都。小さな街ながら、音楽やアート、文学が集まる北欧文化の拠点は、自然と共生する暮らしが息づいています。街の随所に感じられる静けさと透明感が、訪れる人の感覚を研ぎ澄ませてくれます。



Amsterdam / オランダ

アムステルダム / 運河が張り巡らされた水の都。交易都市として発展してきた歴史を背景に、多様な文化を受け入れてきました。歴史的建築と現代の感性が溶け込み、オランダらしい自由でしなやかな暮らしの知恵が、街並みの中に息づいています。

水先案内人から届いたエッセイ 旅がひらく、世界の心と扉

世界を旅することで、持ち帰るものは人それぞれです。それは土産物だけではなく、一期一会の出会い、新たな価値観がもれません。旅の名人であるお二人が、ある国で出会った心に残る光景について、語っていただきました。



音楽評論・作詞家 湯川れい子 Reiko Yukawa

Profile

昭和35年、ジャズ評論家としてデビュー。その後、16年間に渡って続いた『全米TOP40』(旧ラジオ関東・現ラジオ日本)を始めとするラジオのDJ、また、早くからエルヴィス・プレスリーやビートルズを日本に広めるなど、独自の視点によるポップスの評論・解説を手がけ、世に国内外の音楽シーンを紹介し続け、今に至る。作詞家としては、代表的なヒット曲に『ランナウェイ』、『センチメンタル・ジャーニー』、『六本木心中』、『恋におちて』など多数。

アイスランドの思い出



私にとって旅とは、単なる移動ではありません。音楽への探究心を軸に、人との出会いがあり、そして過去・現在・未来へと連なる「自己」を見つめるきっかけが訪れる、壮大な体験だと感じています。過去に何度かピースポットでも旅してきましたが、本当に楽しかった。いろいろな世代、さまざまな思想を持つ人たちが混じり合っている空間は、ほかのクルーズにはない楽しさですね。

アイスランドに、私は忘れたい思い出がありません。日本が生んだ最も世界的なアーティスト、オノ・ヨーコさんが2007年、首都レイキャビクに世界平和を祈願する光のモニュメント「イマジン・ピース・タワー」をつくりました。以前、私はヨーコさんに「なぜアイスランドなの？」と尋ねたことがあるんです。彼女はこう教えてくれました。ひとつは、冷戦下の1986年にレーガンとゴルバチョフが会談し、「冷戦の終わりはじまり」となった場所であること。そしてもうひとつ、アイスランドは世界で最初の民主主義の会議が始まった場所だということ。そういった歴史ある場所に、ヨーコさんはジョンとの思い出から着想した光のタワーを建てたのです。

彼女の妻は、その愛の深さと精神力にありません。ジョン・レノンがあのような悲劇で亡くなった時、彼女は血まみれになったジョンの眼鏡を、洗うことなくそのまま窓辺に置きました。そして、それを自ら撮影し、アルバムジャケットにしたのです。私なら、辛くて洗ってしまったかもしれない。でも彼女は、悲しみを直視し、「二度と繰り返してはいけません」という強烈なメッセージに変えたのです。アイスランドの地で、私は彼女の祈りと、平和への強い意志を感じずにはられません。

※本クルーズ中に「イマジン・ピース・タワー」の点灯をご覧いただくことはできません



世界の台所探検家 岡根谷実里 Misato Okaneya

Profile

東京大学大学院工学系研究科修士課程修了後、クックパッド株式会社に勤務し、独立。世界各地の家庭の台所を訪れて一緒に料理をし、料理を通して見える暮らしや社会の様子を発信している。40以上の国と地域、190以上の家庭を訪問。講演・執筆・研究などを行う。著書に『世界の食卓から社会が見える』(大和書房)、『世界のお弁当とソトごはん』(三才ブックス)など。京都芸術大学客員講師。探検の傍ら、現在はオランダの大学で文化人類学を専攻中。

オランダ、合理と団らんの食卓



オランダの食を一言で言うならば、「合理的」。職場の昼食休憩は30分で、学生も社会人も大学教授も、茶色い食パンにチーズを一枚はさんだものを取り出してかじりつきます。普段の夕飯は、焼いた肉、ゆでじゃが、ゆでたさやいんげんか芽キャベツを皿に並べたのが定番。夕飯の支度にかける時間は30分以下、スーパーにはカット野菜が各種並び、エアフライヤーが大活躍。食べるのもつくるのも、効率中毒なんじゃないかと思うほど合理的です。その背景には、プロテスタントの中でも禁欲主義の強いカルヴァン派の影響があるとされています。

そんなオランダの食をたから見て「食に興味がないのかな」と思っていたのですが、生活していると違った一面も見えてきます。夕方16〜17時になると、働いている人たちは家に向かいます。夕飯は17〜19時頃という家が多く、私の知り合いは皆家族揃って食べることをとても大事にしています。家族で食卓を囲む機会は、大人は残業子どもは塾に忙しい日本より多そうです。レストラン選びでも味より雰囲気よさを重視する人びとと過ごしていると、食の豊かさは皿の上だけではなく、それを囲む人びとの間に生まれるのだとはっとさせられます。

ストリートグルメでぜひ食べていただきたいのが、ハーリング(ニシンの塩漬け)。屋台では食べやすいよう切ってくれることもありますが、まるごとのニシンの尾をつまんで天を仰いで食べる人の姿もあらず。調理もおしゃれな盛り付けも不要。気負わず効率重視なオランダらしい軽食です。



BUENOS AIRES



1:「五月広場」はブエノスアイレスの中心。広場に面する大統領府「カサ・ロサダ」をはじめとする周囲の建築群から、首都としての重みが伝わってくる。2:格式ある建築美が際立つ「コロン劇場」。長年にわたり国際的な舞台芸術を支えてきた文化施設。3:7月9日通りの中央に立つ「オベリスコ」は近代化の節目を記念して建てられた記念碑。昼夜で表情を変える姿も印象的。

ブエノスアイレスの南東に位置するボカ地区は、港湾労働者の街として発展してきた場所。色鮮やかな建物が並ぶ風景から、南米ならではのパッションを受け取ることができます。ボカ地区は観光地として知られる一方、地域の暮らしや文化が今も息づいています。隣接するサンテルモ地区では、古い建物やアンティークショップが並び、落ち着いた

た雰囲気の中で街の原風景に触れることができます。中心街の北部に位置するレコレタ地区は、ブエノスアイレスのもう一つの顔。整然とした街並みの中に「レコレタ墓地」があり、歴史的人物の名が刻まれた墓碑が並びます。さらにパレルモ地区では、公園やカフェ、ショップが点在し、ブエノスアイレスの日常と活気を感じることができます。



人々を魅了する南米の中心都市 ブエノスアイレス

アルゼンチンの首都ブエノスアイレスは、ヨーロッパとラテンアメリカの文化が溶け合い、独特の空気を生み出してきました。政治、文化、芸術の中心として発展し、歴史の厚みをふまえながら洗練された都市としての顔を持つと同時に、中心部から少し足を伸ばすと個性豊かなエリアが観光客を迎えてくれます。

カラフルな建物とストリートタンゴで有名な「カミニート」エリア。スペイン語で「小道」を意味し、かつてイタリア系移民が住んでいた面影を残している。

ボカ地区 Boca



移民文化と港町の歴史が色濃く残るエリア。鮮やかな色彩の街並みを歩いていると、路上で音楽に合わせてタンゴを披露する光景に遭遇することがあり、街そのものが文化の舞台であることを実感させてくれる。

パレルモ地区 Palermo



パレルモ地区は緑豊かな公園や洗練された飲食店が点在し、現在進行形の都市文化を感じることができる。人気のビアガーデン兼レストランではクラフトビールにアルゼンチン料理、そして国際色豊かなメニューも楽しめる。

サン・テルモ地区 San Telmo



石畳の通りと歴史的建築が残るこの地区は、街歩きの楽しさが凝縮されたエリア。通り沿いには雑貨店やアンティークショップが並び、散策しながら個性的なお土産探しを楽しめる。

南米のパリと謳われる美しい街を往く
ブエノスアイレスは、南米でありながらヨーロッパの面影を色濃く残しています。街の中心となる「五月広場」は、アルゼンチンの政治と歴史の舞台であり、その正面に建つ大統領府「カサ・ロサダ」は国の象徴的存在です。独立運動や市民の集會が何度も行われてきたこの広場周辺には、重厚な建築が集まり、首都としての威厳を感じさせます。市街地を南北に貫く「7月9日通り」は、世界でも有数の広さを誇る大通り。中央に立つ高さ68mの白い塔の「オベリスコ」は街のランドマークとして人々の視線を集めています。文化芸術の面では「コロン劇場」の存在は欠かせません。世界屈指の音響を誇るオペラハウスとして知られ、国内外の一流アーティストによる公演が行われてきました。その壮麗な建築は、街が文化を大切にしてきた証でもあります。「アルゼンチン国立美術館」はヨーロッパとアルゼンチンの美術品を1万2千点上収蔵し、ゴッホやピカソなどの絵画を鑑賞できます。

伝統とヨーロッパ文化が融合した アルゼンチングルメ

アルゼンチンの料理は、大地の恵みを活かす郷土料理とヨーロッパの影響を受けた食文化が融合されています。牛肉を中心とした力強い料理に加え、移民文化の影響を受けた多彩な家庭料理も根づいています。街角の軽食から豪快な炭火焼、そして世界的評価を受けるワインまで多様なグルメを堪能できます。



1:「Café Tortoni」はブエノスアイレス最古のカフェ。文化人たちに愛され、店内は博物館のような雰囲気です。アルゼンチンの名物菓子「マイセーナ」をはじめ人気メニューも多くあります。2:「Café Persicco」は地元でも人気のアイスクリームショップ&カフェ。種類豊富なジェラートが楽しい、街歩きの一休みに最適です。



チョリパン
炭火で焼いたチョリソーをパンに挟んだ国民的軽食です。香ばしさと肉汁が魅力で、手軽にアルゼンチングルメを味わえます。

ミラネッサ

イタリアのミラノに由来する料理。薄くのばした牛肉に衣をつけて揚げたものです。サクとした食感と肉の旨みが調和する、気取らない定番料理です。



エンパナーダ

具材を包んで焼き上げた小さなパイ。肉や野菜など地域ごとに中身が異なります。家庭料理としても人気の一品で軽食として重宝されています。



アサード

炭火でじっくり焼き上げる伝統的なバーベキュー。塩味が基本で肉本来の旨みを堪能できます。家族や仲間が集う場に欠かせない料理です。



アルゼンチンワイン

アンデス山脈の麓で育まれたワインは、世界的評価も高く力強さと果実味が際立ちます。旅のお土産としても人気があります。



内臓のミックスグリル

肉を余すことなく味わう精神が表れた一品で、腸やモツを香ばしく焼き上げます。アサードの一部として供されることもあるアルゼンチンらしい食文化です。

Argentine Souvenirs



マテ茶器

アルゼンチン文化を象徴するマテ茶器。茶葉を注いでポンビージャ(ストロー)で飲む本場のスタイルを楽しめる。旅の思い出を生活に残すお土産として最適。

アンティークグッズ

ブエノスアイレスのアンティーク店では骨董雑貨や手作り工芸品。アルゼンチンらしい風土と職人技が感じられる。



ドゥルセ・デ・レチェ

濃厚でキャラメルのような甘さが魅力のドゥルセ・デ・レチェ。パンに塗ったりお菓子に使ったり本場の味をそのまま楽しめる定番土産。

カラフルなプレート

アルゼンチンのクラフトマーケットなどで見つかるプレートは、伝統模様や鮮やかな色合いが特徴で飾って楽しむアート的な土産。

Argentine Tango

人生を踊る、アルゼンチンタンゴの世界

アルゼンチンタンゴは、単なる舞踊ではなく、人々の人生や感情を映し出してきた文化です。港町で生まれ、街角で磨かれ、劇場や世界の舞台へと広がっていったその歴史が、ブエノスアイレスの街に受け継がれています。ピースボートクルーズでは寄港地で、そして船上でのショー体験を通して、タンゴが持つ奥深い魅力にふれることができます。

歴史ある街並みを背景に披露されるタンゴ。石畳の通りに流れる音楽が、街の空気を一変させる。



色鮮やかな街並みの前で繰り広げられる情熱的な踊り。港町らしい活気がそのまま表現されている。



古い建物が並ぶ地区ならではの情景。街角で踊られるタンゴが、ブエノスアイレスの日常を映し出します。



アルゼンチンタンゴは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ブエノスアイレスの港湾地帯で生まれました。移民たちが持ち込んだ音楽や踊りが混ざり合い、労働者や庶民の感情を表現する文化として育まれてきました。哀愁を帯びた旋律と、人々の心に寄り添うような踊りの形には、人生の孤独や希望が映し出されています。

現在もボカ地区やサン・テルモ地区では、街角で自然にタンゴを踊る光景に出会うことがあります。観光客の前で披露されることもありますが、生活の延長線にあるその姿は、タンゴが日常に根付いた文化であることを物語っています。音楽が流れ、人々が足を止め、即興的に踊りが始まる。そんな場面も



寄港地で出会ったタンゴを船上で再体験。プロダンサーによる迫力あるステージに、会場は熱気に包まれた。

この街ならではの魅力です。ピースボートクルーズでも、ブエノスアイレスへの寄港に合わせてタンゴを船内で体感する機会が設けられています。プロのダンサーたちによるステージでは、次々と繰り出される華麗なステップとドラマチックな動き、緊張感あふれる表現が披露され、観客の皆さんをタンゴの世界へ引き込みます。

人生の苦難や希望を歌い上げる
[岡 秀年]

「ライブハウスの野獣」という異名を持つシンガーソングライター。ギター一本で日本全国を駆け巡っていたところ、ピースボート関係者の目に留まり、専属ミュージシャンとして世界と共に旅するようになりました。そのパフォーマンスはまさに「魂の叫び」。ミュージシャンというより、人生を燃やす表現者です。汗だくになりながら、たぎる熱量で人生の苦難や希望を歌い上げます。泥臭くも人間味あふれる生きざまにふれることで「明日も生きてやろう」という活力が湧いてきます。



船上を彩る音楽の仲間たち

ピースボートクルーズの船内では、ジャンルを超えた多彩な生演奏が毎日あちこちで響き渡ります。ロック、ジャズ、クラシック、ポップスなど音楽家たちが奏でる一音一音が聴衆の心に寄り添い、洋上のひとときをよりいっそう豊かに彩ります。



ベネズエラ出身のピアノカルテット
[Venezuelan Vibes]

開放的なアトリウムの空間を、優雅で洗練された旋律が彩ります。お届けするのは全員ベネズエラ出身のピアノカルテット。卓越した演奏技術と音楽性のルーツはベネズエラが世界に誇る音楽教育プログラム「エル・システム」にあります。数々の世界的巨匠やトップアーティストを送り出してきた教育環境が育んだ彼らの演奏は、鉄壁のアンサンブルを誇ります。そこに南米特有の底抜けの明るさと情熱が融合し、躍動力が聴衆の心にダイレクトに響き渡ります。世界水準の極上のハーモニーとエネルギーに満ちたステージを間近でご堪能ください。



ピースボートクルーズの楽しみのひとつが、航海中に船内で練り広げられる音楽ライブです。今回紹介するパワフルなロック、繊細な弦楽三重奏とピアノが織りなすカルテット、心揺さぶる歌声といったように、世界中から集った多彩なミュージシャンが乗船し、連日パフォーマンスを披露します。観客は手拍子、歓声を送り、時には乗客と奏者が一体となる即興セッションが生まれることも。音楽を介した交流が船内の雰囲気をもっと和やかにし、演奏後の笑顔は、寄港地や航海の思い出とともにみなさまの胸に残ることでしょう。



PEACE BOAT Musicians



進化し続ける至高のロック魂
[Deep Sky]

15年前からピースボートに乗船し続けるフィリピン出身のロックバンド「Deep Sky (ディーブスカイ)」。キーボード、ギター、ベース、ドラムスとメインボーカルの5人編成バンドで、ソウルフルな洋楽から日本や中文のヒット曲までを圧巻のグループ力と演奏技術で聴かせます。彼らの生演奏で踊ることを日課としている常連客も多く、プールサイドでのライブでは青空の下、開放感をさらに高める熱いステージを披露します。



クルーズディレクター
尾形 康仁 OGATA Yasuhito

Voyage124で初のクルーズディレクターを務める尾形康仁。初の大役は、待ちに待ったものでもありました。「あなたがクルーズディレクターで良かった、と言っていただけのような世界一周の旅にしたい」と語る尾形に、クルーズへ向けての意気込みなどを聞きました。

Profile
千葉県成田市出身。ジブリ映画「魔女の宅急便」に登場する男の子に似ていたことからニックネームは「とんぼくん」。「当時からずいぶんサイズアップしてしまいました」とは本人の弁。「でも体重は気にしていません、世界各地で一緒に美味しいものを食べましょう!」



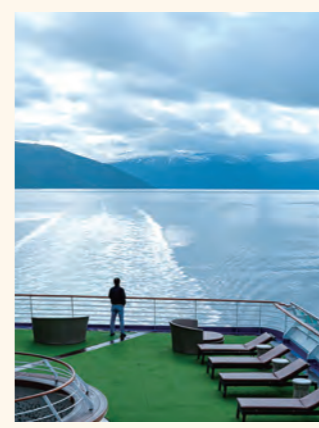
「対話」をコンセプトに、
皆さまの声を聞きながら、より良い旅にしていきます。

ピースボートとの
出会いについて教えてください。

私は高校卒業後の18歳から一年半、ひきこもりの時期がありました。そんなとき、母が興味を持って取り寄せていたピースボートの資料を、なんとなく手にしたのがきっかけです。当時の私は自分を変えたいけれど勇気を出せない状態でしたが、資料から、若者でも地球一周できる制度があることを知りました。世界を見たら自分の価値観も変わり、ひきこもりから脱け出して頑張れるんじゃないか、と思ったんです。それですぐに説明会に参加して、半年後のクルーズに乗船することを決意。ボランティアスタッフとして活動して、世界一周の旅に出かけました。

ピースボートクルーズで
どのようなことを得ましたか。

一つは、同世代の韓国の女の子と仲良くなったことです。船上パーティでサルサと一緒に踊ったことをきっかけに、どんどん仲良くなり、覚えてたの韓国語とたどたどしい英語でコミュニケーションをとりました。下船後は互いの



その後、ピースボートスタッフとして
活動してきたのです。

世界には諍いや争いが絶えませんが、違う国の人間同士でも出会い、つながることによって相手の国のことを好きになります。それは世の中を変えていく力

になると思っています。私は韓国の女の子と仲良くなることで、それを体験できたのがピースボートだと思っただけで、スタッフとして誘われて活動するようになりまして。20歳のときのことで、以来13年間、東京や大阪で船旅にかかわる仕事をしながらピースボートクルーズで地球を8周しました。

ピースボートの魅力は
どんな点にあると感じていますか。

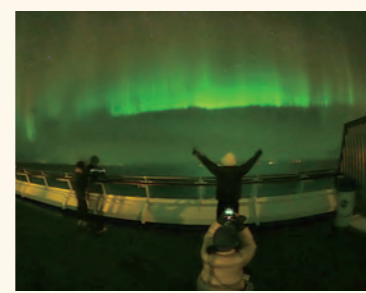
たくさんありますが、船内では世代を超えた出会い、友情が芽生えること。最近でもウクレレの練習を通して仲良くなった老若男女のグループが寄港地のハワイのビーチで皆で演奏したという話を聞きました。世界を見るといふ面では、以前カンボジアでポル・ポト政権下で埋められた地雷に怯えながら暮らす人々を訪ねたことがあります。自分が暮らしている平和な日本との違いに愕然としました。こうした単なる観光だけではない「リアルな世界」を見て、感じ、考えることが私の人生観を揺さぶる意義深い経験となりました。

Voyage124で
クルーズディレクターを務めます。
就任をどう受け止めましたか。

正直とても嬉しかったです。隠れてガッツポーズ決めるくらい嬉しかったです(笑)。ただ1900名の参加者の皆様がクルーズへ寄せる「想い」「期待」も十分わかりますから、それに応えることへのプレッシャーも感じました。

どのようなクルーズにしたいと
考えていますか。

今回皆さまが最も期待しているであろう、オーロラ鑑賞をはじめ、訪れる場所や寄港地を最大限楽しんでいたできるように、たとえば事前にその文化、歴史などを知ることのできる船内講座を企画したり、皆さまがどんなことを求められているかをしっかり聞いて、サービスマンやプログラムに反映していきたいです。クルーズディレクターは1900名のお客さまの代弁者であり、ピースボートの「顔」でもありますから、今回は「対話」をコンセプトに臨みます。これはまた70名のピースボートスタッフに対しても同じことで、コミュニケーションをとって強いチームワー



参加者の皆さんへの
メッセージをお願いします。

私は食べることもお酒を飲むことも大好きで、ピースボートに入って30キロも体重が増えてしまいました(笑)。世界各地のグルメを楽しむことも大好きで、これまでの経験から寄港地の情報も色々お伝えできると思います。また皆さまとも船内で一緒に食事をしたり、お酒を飲んで交流ができたらと思っています。ぜひお声がけください! またカラオケも好きで得意ですから、一緒に楽しめたらと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

船上百景 [星空観望会]



暗闇の中で星が一斉に現れる瞬間には歓声が上がる。

洋上で堪能する、 壮大な天然プラネタリウム

航海中の新月の夜に開催される星空観望会。会場のプールデッキには多くの人が集まってきました。船の外灯が落とされ、周囲に街の灯りも建物もない洋上は、夜空に驚くほど多くの星が輝きます。静かな海と満点の星に包まれるひとときは、クルーズならではの贅沢な時間です。観望会では天文の専門家が専用のレーザーポインターを使って星座を解説し、星の位置や見つけ方を教えてくれます。航路が赤道を越えると、北半球と南半球で星座の見え方が変わることにも気づきます。例えばオリオン座の向きが逆に見えるなど、世界を旅する船ならではの発見もあります。波の音を聞きながら空を見上げ、自然がつくり出す壮大なプラネタリウムを、ぜひご体験ください。



星空コスチュームのスタッフがお出迎え。



宇宙の広がりも感じられる神秘さ。



「あなたと出会えた幸運に感謝している」——。ミラノ・コレティナ五輪、スノーボードで金メダリストとなった中国の選手が、日本人コーチ佐藤康弘氏に贈った言葉です。日中両国のウエアをまとい、教え子を鼓舞し続けた佐藤氏が、両選手に金メダルをかけられ、共に快挙を喜び合う姿に胸が熱くなりました。政治的に冷え込む関係も、この世界には関わりません。そう確信させる「平和の祭典」の真髄を見せてもらったと感じています。

この風景は、船旅の下船間近の光景によく似ています。共に過ごす長い航海では、「どこから来たか」といった属性はいっしか消えていき、代わりに、その方が歩んでこられた人生で「何を積み重ねてきたか」が浮かび上がってきます。一人の人間として向き合い、互いの人生の歩みに敬意を払う。ピースボートの旅もまた、国境のない一つの「村」のような場所ではないでしょうか。

「日本と中国の未来のために」。そう語り、懸け橋として歩み続ける佐藤氏の想いは、教え子たちへ着実に受け継がれています。世界中で友情の橋を架け続けるピースボートの船旅も同じです。この草の根のバトンを、毎クルーズ大切に引き継いでまいります。(長谷川編集部)